



## 報恩講 如来回向の儀式

### ■ほんこさま、おしちやさま

初めての出仕は、自坊の報恩講だった。当時、3歳。衣体の着用は、本来得度を終えてからご許可いただけるものであるが、祖母が一番小さいサイズの間衣をすそ上げし、着させてくれた。断片的ながら思い出せるのは、長いお勤めに耐え切れず居眠りし、抱えられて退堂したこと。私が手を合わせてお念仏するのを、みんなが喜んでくれたこと。そして「ほんこさまが来たな」、「おしちやさまが来るでな」と周りがにぎわしかったこと。念入りの清掃やお荘厳、お斎の準備でにぎわしい台所といい香り。いつもと違う寺の様子を感じ、「ほんこさま」と「おしちやさま」というえらい方々が圓徳寺に来られるのだらうと、3歳ながらそわそわした記憶がある。

思えば、行事に「さま」という敬称をつけて呼ぶことがあるだろうか。「運動会さま」、「健康診断さま」などとは聞いたことがない。「さま」の響きに、先人たちがいただかれてきたことの大きさを、今さらながらに感じている。

### ■法要の原則

本山での声明講習会にて、「人に関する法要」では、「一昼夜」のお勤めが原則となる、と教えていただいた。一昼夜とは、

- ・逮夜（ご命日前日の午後のお勤め）
- ・晨朝（ご命日当日のおあさじ）
- ・日中（ご命日当日の午前のお勤め）

という三回の勤行である。親鸞聖人の祥月命日を機縁とした報恩講は、もちろん「人に関する法要」に当たる。本山においては、11月21日の逮夜に始まり、28日の日中に至るまでの都合8日間、七昼夜のお勤めがなされる。報恩講が、「お七昼夜さま」とも呼び習わされてきた所以であろう。この七昼夜のお勤めは、『口伝鈔』の奥書に「七日七夜」と見られる（『真宗聖典』P676）ことから、少なくとも覚如上人の時代から続けられており、祥月命日のお勤めが大切にされてきたことがうかがえる。

現代においては、どうだろうか。年忌のご法要などは、一座だけのお勤めが当然になっている。寺院でも、報恩講、また御遠忌法要にて、一昼夜（都合2日間）の勤行が勤まらないことも増えたように感じる。圓徳寺でも、昔は一昼夜の報恩講に加え、日を改めてご門徒主催の報恩講が二昼夜、都合5日間の法要が勤まっていたが、時を重ねるにつれ、お座の数も少なくなってしまった。

昨今は特に、コロナ下ということもあり、時代の流れに応じて法要の形を変えることを否定はしない。しかし、原則を知らないまま形を変えてしまうことは、何とも勿体ない気がする。

### ■蓮如上人の大きな仕事

長く続けられてきた七昼夜のお勤めを、「報恩講」と呼ぶようになったのは、蓮如上人の時代からである。それまでは、「別時」、「御報恩」、「大谷念仏」などと呼ばれていたようだ。

蓮如上人は、親鸞聖人の祥月命日を機縁とした法要を「報恩講」と名付けるだけではなく、「改悔」や「懺悔」（『御文』第三帖第十一通）、また「信不信をあいたずねる」（『御俗姓』）場が報恩講である

とし、儀式の中に組み込まれていった。つまり、親鸞聖人の徳を讃えるだけでなく、自身の信仰を確かめ合う儀式として報恩講をつくりあげたのである。

報恩講翌日のおあ

さじ、「お浚え」と言われる勤行も、その一つであろう。正しくは、蓮如上人がこのお勤めを定めたという確認はできないものの、蓮如上人の意思を受け継いだ儀式であることは間違いない。

お浚えでは、『正信偈』のあと、「仏智疑惑和讃」（「不了仏智のしるしには」から次第六首）をお勤めし、『御文』は、第二帖第一通の「お浚えの御文」を拝読する。声の限りを尽くして、感謝と喜びを表現し、華々しく恩徳讃でご満座を終えた翌日に、余韻に浸る余地など感じさせない、仏の智慧を疑う我が身を嘆くご和讃をお勤めする。報恩講をお勤めできた満足感にとどまらず、今一度、教えから問われ続けていくことの大切さを、儀式の中から呼びかけられている。願いが、儀式という形となって、回向されている。この事実を、先に勤めあげてこられた先人たちは「ほんこさま」、「おしちやさま」と尊くいただかれたのだらう。

最後に、池田勇諦氏のお言葉をお借りして申し上げたい。私たちはご満座教団であってはならない。お浚え教団にならなくてはならない。

高山別院報恩講掌儀

高山2組 圓徳寺住職

窪田 純



## 飛騨御坊高山別院報恩講 慶讃法要お待ち受け 2022年11月1日(火)~3日(木)

### ★センター・別院からのお知らせ★

※各行事は、コロナ感染の状況により中止や変更になる場合があります。

#### 別院境内 石垣崩壊箇所を修復しました

高山別院の境内地は四方を壮大な石垣で囲まれていることが特徴です。西側、下一之町方面に面した石垣の一部に、「坊」「高山」といった字が彫られているものが使用されているところがあり、歴史が感じられます。近年、ゲリラ豪雨、台風等で一時的に大雨の時があり、広い境内地に大量の雨水があふれ、別院西側一帯は、雨水対策が施されていなかったため、長年、表面排水の地下浸透が続いてきました。このような状況により、内部から徐々に巨石が押し出され、落石に到ったことでした。今回の事態が大きな崩落と人災に到らなかったことが、不幸中の幸いでした。このことにより、U字溝の布設、石垣の隙間埋め等を行い、災害に対応した基盤整備を行いました。



#### 帰敬式法座事前研修会 日中と夜の2回開催

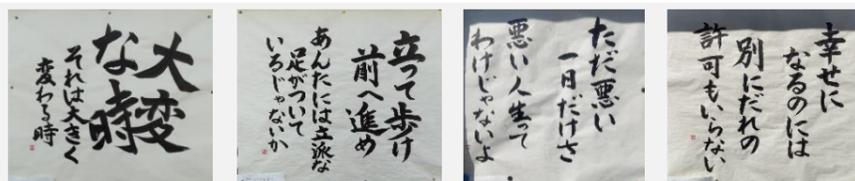
去る10月20日、帰敬式法座の別院での事前学習会が、午後1時半からと午後7時からの2回開催されました。どちらかの座に出席いただくことで案内されており、1回目では約70人、2回目では約30人が参加されました。11月3日の帰敬式の執行も迫っており、今後、各組での研修も実施されてまいります（高山1組は9月に終了）。

#### 岐阜別院報恩講団体参拝 参加者募集

このたび、岐阜別院報恩講が勤まるにあたり、下記のとおり団体参拝を企画いたしましたので、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

参拝日 12月10日(土) 参加費 ¥5,000-  
定員 30名(定員になり次第、締め切ります)

#### 中高生の法語掲示



現在、取り組まれている帰敬式法座の実施に向けて、今年3月29日、スタッフの事前学習会が開催され、四衢亮師(不遠寺)にご講義をいただきました。その講義録を、今号から6回にわたり掲載いたします。前号までの連載と合わせて、「同朋教団としての確かめ点としての帰依三宝」について、一緒に考えてまいりたいと思います。

■私たちは何を宝として生きているのか

ただ今ご唱和いただきました三帰依文は、帰敬式受式のときに拝読されるものですが、この文章がそのまま完成された形でどこかに載っているのではなく、明治の頃に作られたものとお聞きしております。

最初の「人身受け難し」というところの出典は、『法句経』だと聞いています。真ん中のみんなで唱和するところは『華嚴経』、最後の2行は『無量義経』の開経偈といわれるところから引用されているとのことです。この形の三帰依文は、大内青巒<sup>おおうちせいらん</sup>という方が、大日本仏教青年会が結成された時に制作されたとのことです。

私たちが仏法を聞くということは、三宝に帰依するということを確認することを意味します。そのことをあらためて自分自身に問うという意味で、三帰依文を唱和してから法座が始まるのだと思います。

この「至心に三宝に帰依したてまつるべし」と、仏と法と僧ということをも自分自身の人生の宝にしていくんだと確認して自らにも表明し、さらに外に向かっても表明するということが帰敬式であろうと思います。

ただ、仏と法と僧を大事にします、宝にします、と誓い表明したからといって、直ちに宝になるかという、それは難しいことだと思います。むしろそのことを通して、自分にとって今、何が生き甲斐なのか、何を宝にして生きているのかが問われるという、一つの視点をいただくということが大切です。仏と法と僧が宝にならないとなると、一体何を宝にしているのか。例えば、経済的なことを宝にする方もおられるでしょうし、自分の健康とかあるいは家族とか、いろんな社会的なスキルをもった地位であるとか。その自分が宝にしているものは、本当に人生を貫く宝なのかどうか。そういう大事な確かめをしていく機会とすることが大切だと思います。

■在家仏教①—仏教教団の起こり

三帰依の起こりについては、宗派で発行されております『帰敬式の手引き』にも出ておりますが、「本縁部」という経典郡の中に『仏本行集経』というお経があり、その中に収められている内容により確認してまいりたいと思います。

釈迦が初めて説法をして小さな(6人の)教団として仏教教団が出発してほどなく、ヤサという青年が出家得度し、仏弟子となった。そのヤサの父が初めにさらに続いて、母と妻が在家の仏教者として許された。

このように仏伝には出てまいります。お釈迦様が覚りを開かれて、現在のサルナート、鹿野苑というところで、昔一緒に修行して

いた阿若憍陳如(アンニャ・キョウダンジョ)、摩訶男(マカナン)、婆提(バダイ)、婆敷(バズ)、阿説示(アッサジ)という5人の比丘たちと再会し、お釈迦様は比丘たちに自ら覚った内容を語られました。いわゆる初転法輪という形で法話が始まります。お釈迦様の話を聞いて、5人がいっぺんに覚りを開いたのではなく、順番に覚りを開いていき、最後に阿説示(アッサジ)が覚りを開いたということです。ここに6人の小さな仏教教団が誕生したと、仏伝に出てまいります。

お釈迦様が覚りを開いただけで仏教は始まったわけではありません。お釈迦様が覚った内容をお釈迦様が語られ、それを聞いて同じように覚る人が現れて、初めて仏陀の覚りが他の者にも通用するという、そういう証明者を待って初めて仏教教団が完成します。いくら覚ったといっても、それはとても私達には理解できないとか、わからないとか覚れないということになったら、これはお釈迦様の思い過ごしということになります。ですから、お釈迦さまを含めて6人が同じように領きあって仏教教団が誕生し、そこから仏教が始まっていきます。

そういう意味で、お釈迦様が覚りを開いたということは、全ての人間の上に覚りが開くんだということをはっきりとされたことがあるわけです。

高山1組 不遠寺住職  
企画会議副座長 四衢 亮



『高山市民時報』ミニ法話『響』11月

- 白尾 匡氏 (朝日高根組長圓寺住職)
- 夏野 了氏 (清見組満成寺住職)
- 鍋山 大輔氏 (高山2組寶圓寺住職)
- 小原 正寛氏 (高山1組専念寺衆徒)

web ひだご坊でも「一口法話」配信中!  
※印刷したものの郵送をご希望の方は、教務支所までご一報ください。

第41回 真宗公開講座 共通テーマ:立教開宗とは

- 11月1日(火)午後7時《無料》主催:真宗同朋会  
講師:細川好圓師(三条教区護念寺) 講題:本物になる一本願に遇う一
- 12月6日(火)午後2時《500円》主催:真宗同朋会  
講師:大島義男師(雲集学舎主宰) 講題:本願の欲生心成就
- 1月17日(火)午後2時《500円》主催:真宗同朋会  
講師:藤井慈等師(三重教区慶法寺) 講題:「首の飛ぶような念仏」



飛騨御坊真宗教化センター・高山別院 2022年11月行事予定 ※コロナ感染の状況により中止や変更になる場合があります。

日	曜	時間	ご坊センター・高山別院・教区	会場
1	火		別 報恩講	本堂他
2	水		別 報恩講	本堂他
3	木		別 報恩講	本堂他
4	金	7:00	別 お浸え勤行	本堂
5	土			
6	日			
7	月			
8	火			
9	水			
10	木			
11	金	7:00 13:00	別 半日華 別 大谷婦人会報恩講 法話:三島多聞氏(輪番)	本堂
12	土			
13	日	7:00	別 前往上人ご命日	本堂
14	月			
15	火	19:00	組 莊白川組 同朋唱和推進の願いを考える会	寶藏寺
16	水			
17	木			

日	曜	時間	ご坊センター・高山別院・教区	会場
18	金			
19	土			
20	日			
21	月	19:00	教 教化研究所	研修室
22	火			
23	水	19:00	別 寺内報恩講	御坊会館
24	木			
25	金	19:00	組 莊白川組真宗公開講座	明善寺
26	土	7:00	別 半日華	
27	日	13:00 14:00	別 親鸞聖人お逮夜 組 吉城組帰敬式法座	本堂 誓願寺
28	月	13:00	別 親鸞聖人御命日 法話:日野益良氏(桂林教会前主管者)	本堂
29	火	13:30 19:00	七 解放推進協議会高山地区輪読会② 組 高山2組帰敬式法座	センター室 御坊会館
30	水	15:30	組 高山1組 組会	研修室

2022年12月 ※15日ごろまでの掲載とし、定例行事は省きます。

日	曜	時間	ご坊センター・高山別院	日	曜	時間	ご坊センター・高山別院
4	日		組 益田組帰敬式法座	9	金	19:00	組 高山2組親鸞教室①
5	月	13:30	組 教化研究所課題別講義 web	13	火	13:30	組 高山2組 組会
6	火	14:00	七 真宗公開講座				